

41666

教科書文庫

4

810

31-1937

20000

19072

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

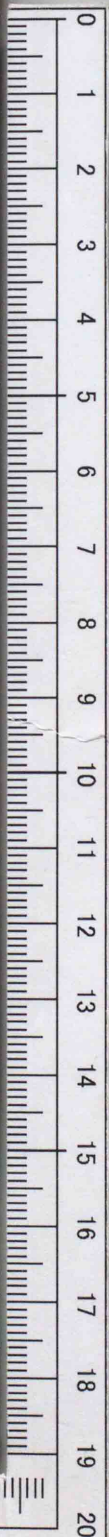
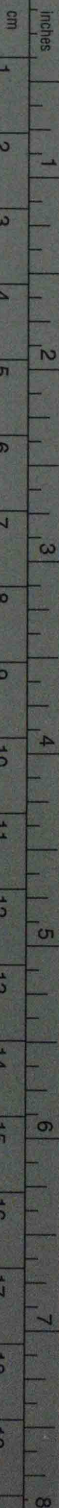


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書
31
2000

小學國語讀本

尋常科用

卷八

文部省



教科書文庫
4
810
31-1937
2000019072



小學國語讀本 卷八

文部省

尋常科用

広島大学図書
2000019072

資料室

3959
M014

広島大学図書



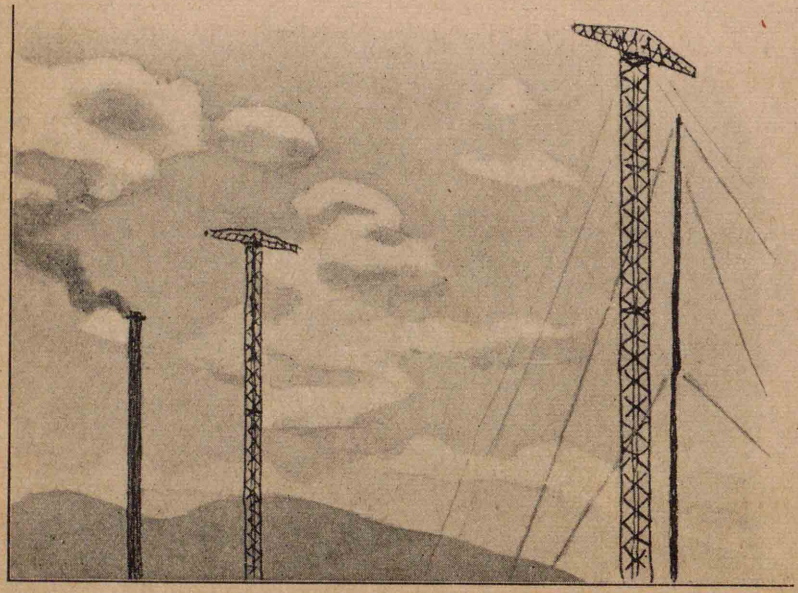
東京大学
図書印

もくろく

第一	青空	一
第二	つばめはどこへ行く	三
第三	吳鳳	十二
第四	大連だより	十八
第五	朝の大連日本橋	二十八
第六	くりから谷	三十二
第七	萬壽姫	三十五
第八	晩秋	四十七
第九	大演習	五十一
第十	菊	六十一
第十一	ひよどり越	六十三
第十二	振子時計	六十八
第十三	小さい傳令使	七十四
第十四	自動織機	七十九
第十五	福壽草	八十八
第十六	スキー	九十
第十七	扇の的	九十七
第十八	弓流し	百一
第十九	物のねだん	百四
第二十	廣瀬中佐	百十二
第二十一	ホノル、の一日	百十五
第二十二	コロンブスの卵	百二十四
第二十三	漁村	百二十七
第二十四	水族館	百二十四
第二十五	早春	百四十八
第二十六	清水トンネル	百五十

第一 青空

青空は
どこまでも
高いよ。
細長い煙突や
アンテナが、
背のびしてゐる。



第一 青空

尋國八

青空は

どこまでも

續くよ。

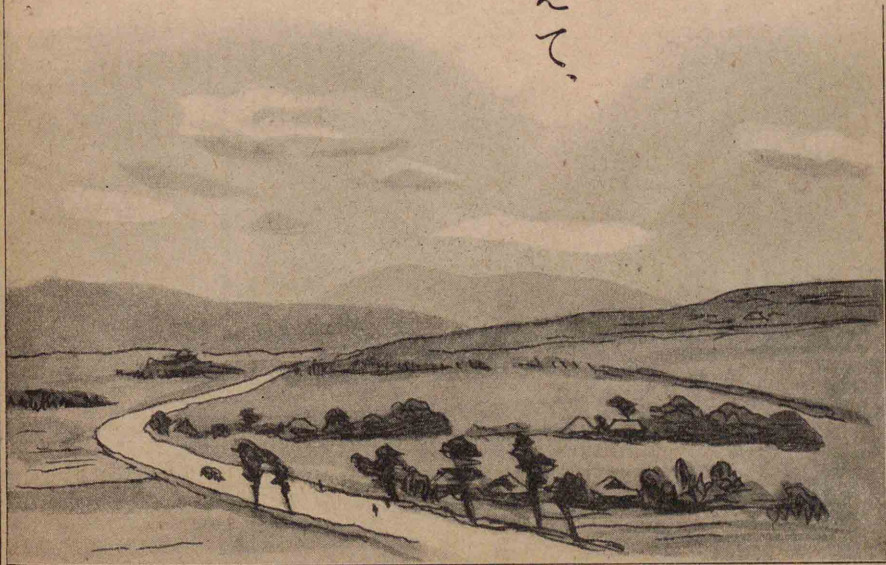
野を過ぎて、山越えて、

たゞ一筋、

道が白い。

青空は

どこまでも



竿干

廣いよ。

寄せる波、返す波、

波また波、

沖が遠い。

第二 つばめはどこへ行く

夏の末頃、つばめが、電線や物干竿に五六羽ぐらゐ並んで止つて居るのを、よく見かけます。時には十羽二十羽も、ずらりと並んで居るこ

第二 つばめはどこへ行く

とがあります。其の中には親つばめも居ますが、今年生まれた子つばめが、たくさんまじつて居ます。もう大ききだけは親つばめと同じですが、まだ口ばしの下の赤色が、親つばめ程こくありません。口ばしの兩わきが、幾分黄色に見えるのさへあります。かうして大勢のつばめが並んで居るのを見ると、何かしら、彼等は相談でもして居るやうに見えます。間もなく去つて行かねばなら

初 續

ぬ日本に、なごりを惜しんで居るのかも知れません。これから行かねばならぬ遠い國のことを、話し合つて居るのかも知れません。やがて九月もなかばを過ぎると、つばめはそろそろ日本を去つて行きます。十月には續續と去つて行きます。十一月の初になれば、もうほとんど其の姿を見せなくなつてしまひます。一體、どこへ行くのでせうか。

記

つばめの行先は、遠い、南の海のかなたです。

東京から四千斤もあるフィリピンで、或年の十月の末、子供がつばめをつかまへました。すると、其の右足に、日本の文字を記した小さい金属きんぞくの板が附いて居ました。それによると、埼玉さいたまけん縣の或所で、試みにしるしを附けて放したものだといふことがわかりました。しかし、つばめはもつともつと南へ飛んで行

試

速

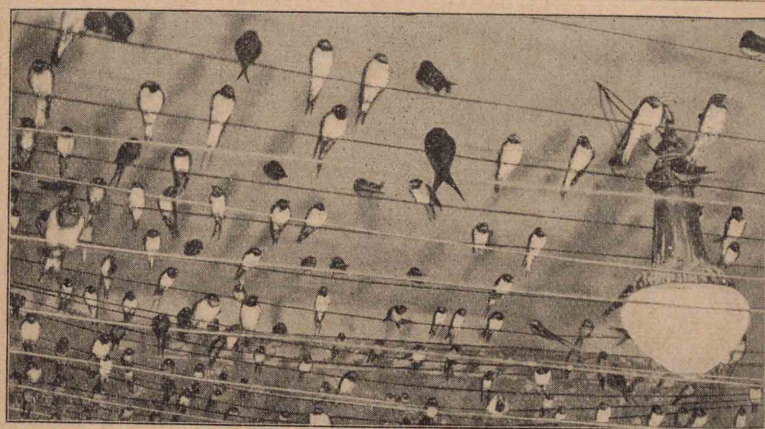
くのです。南洋の島々から、中にはさらに海を越えて、遠いオーストラリアまで行くのがあるといふことです。

つばめは、鳥の中でも一番速く飛ぶ鳥です。汽車や自動車もかなはぬくらゐの速さです。から、幾百斤の海を一氣に飛ぶことも、決して不思議ではありません。しかし、彼等の中には、今年生まれた子つばめがたくさん居ます。又時に不意のあらしや、其の他思ひがけぬ災

他

難にあはぬとも限りません。

昭和 約 順候 飛行



昭和六年の秋でした。ヨーロッパの或國で、約十萬羽のつばめが急に落ちて來ました。其の年は氣候が不順で、九月の中頃急に寒くなり、雨が降續きました。折から南へ飛行中だったつばめは、食にうゑ、冷たい雨にずぶぬれ

疲

易容

になつて、もう身動きも出來なくなつてしまつたのです。そこで、其の國の人々は、此の疲れはてた鳥を拾ひ集めて、暖い家に入れてやり、食物を與へてやりました。さうして、疲れのなほるのを待つて、南の暖い國へ送つてやりました。何しろ十萬といふ數ですから、これを送るのも容易ではありません。九月の末から十月の初にかけて、汽車や飛行機で何回にも送つたといふことです。

軒 法 旅

昔から、つばめは同じ家に歸つて來るといはれて居ます。つまり、今年或家の軒下で巢すを作つたつばめが、來年又同じ巢へもどつて來るといふのです。近年になつて、いろくの方法で此の事をしらべてみますと、やはりさうであることがわかりました。たゞあの小さい體で長い旅行を續けるせゐか、途中で死んで歸つて來ないつばめも、かなり多いといふことです。

日本からオーストラリアやまでは、一萬軒以上もあります。つばめは決して自分の國を忘れません。日本に春が來ると思へば、もう彼等は矢もたてもたまらず、北をさして進むのです。其の小さい胸には、若葉のもえる日本の春の美しさを思ひ浮かべて居るでせう。青々と植ゑつけられた夏の稲田を思ひ浮かべて居るでせう。何よりも、あの家の軒下で作つた古巢がなつかしいのでせう。

春になると、誰もが此の珍しいお客の歸つて来るのを待ちこがれて居ます。ちらりとつばめの姿を見た人は、きつと

「今日、始めてつばめを見たよ。」

と言つて喜びます。わけても、自分の家へいそいと歸つて來たつばめを迎へる人の心は、どんなに嬉しいこととせう。

第三 吳鳳

臺灣の蕃人には、もと、人の首を取つてお祭に供へる風があつた。阿里山蕃の役人になつたばかりの吳鳳は、何とかして、自分の治める部落だけでも、此の悪い風習を止めさせようと思つて、いろく苦心をした。

「人を殺すのは、よくない事である。」

かう言つて、吳鳳はしばく蕃人に説聞かせた。しかし、お祭が近づくと、蕃人はぜひ首を供へなければならぬと申し出た。吳鳳は、

「去年取つた首があるはずだ。一體、幾つあるのか。」

「四十餘りあります。」

「それでは、其の首を大切にしておいて、これから毎年一つづつ供へることにするがよい。」

蕃人はさとされて、しぶく引きさがつた。

吳鳳は元來情深い人で、蕃人を非常にかはいがつたから、蕃人も次第になつて、後には吳

情元

鳳を親の如くしたふやうになつた。かうして、阿里山蕃だけは、しばらく首取の事も止んで平和が續いたが、外の部落では、毎年祭がある度に首を取つて供へて居た。それを見るにつけ、聞くにつけ、阿里山の蕃人は心を動かされた。

四十餘年は何時の間にか過ぎて、もう供へる首が一つもなくなつた。「今年こそ、新しい首を供へなければならぬ。」といふので、蕃人は

其の事を吳鳳に申し出た。吳鳳は、

「もう一年待つてくれ。人を殺すのはよくない。」

となだめた。

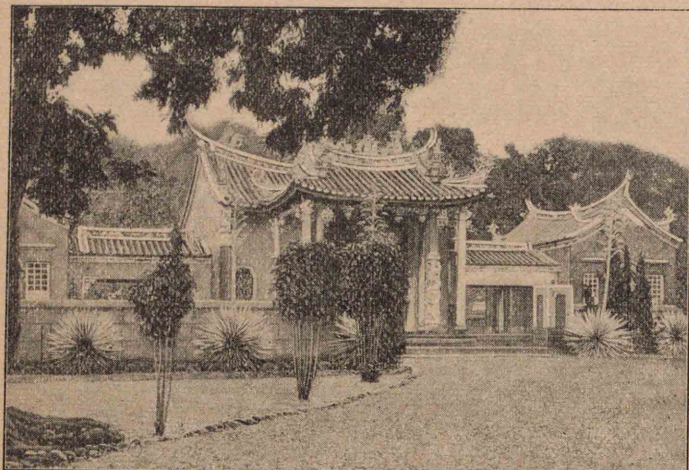
翌年も翌々年も同じ事がくり返された。蕃人は、そろそろ吳鳳の心を疑ふやうになつた。さうして、四年目には、もうどうしても吳鳳の言ふことを聞かうとしなかつた。

「それ程首がほしいなら、明日の晝頃、赤い帽

疑

果

子をかぶつて、赤い着物を着て、こゝを通る者の首を取れ。」



と、吳鳳は答へた。

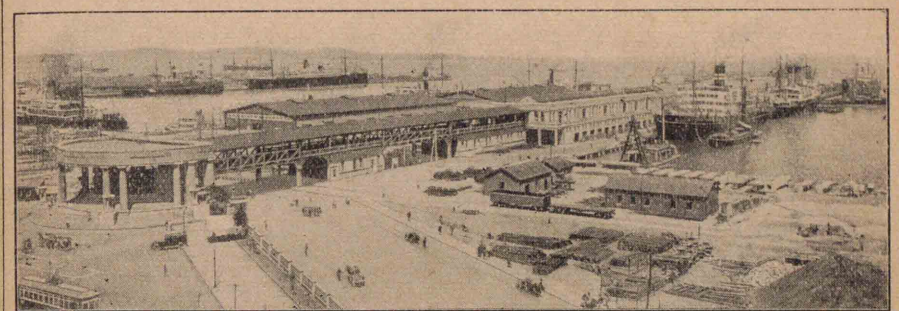
翌日、蕃人どもが役所の近くに集つて居ると、果して赤い帽子をかぶり、赤い着物を着た人が來た。待ちかまへて居た彼等は、忽ち其の人を殺して首を取つ

てしまった。
意外にも、それは吳鳳の首であつた。親のやうにしたつて居る吳鳳の首であつた。蕃人どもは聲を上げて泣いた。彼等は吳鳳を神に祭つた。さうして、それ以來、阿里山蕃には首取の悪習がふつつりとなつた。

第四 大連だより

皆さん、お丈夫で何よりです。机の上には、皆さんからのお手紙がのつて居ると、私は嬉しくてなりません。表の字を見ただけで、誰さんからのだといふことが、すぐわかります。皆さんの山遊びのことや運動會の様子などが、目に見えるやうです。此の前、大連の町の名に、日露戦争の將軍方の名を取つて、大山通とか乃

郷 降 西

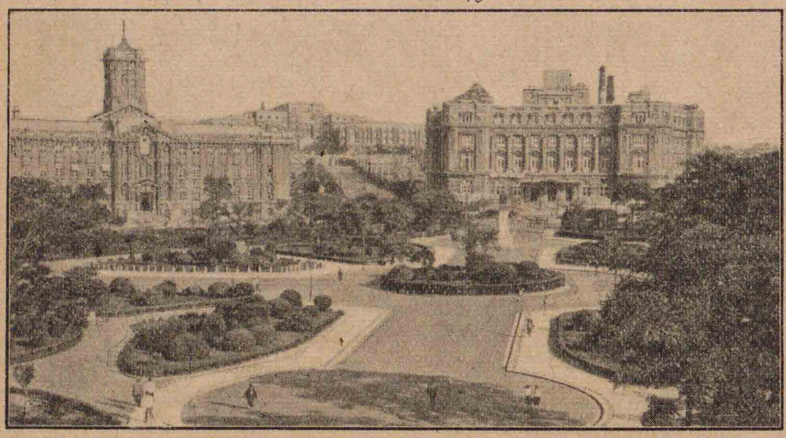


木町・東郷町とかいふの
 があることをお知らせ
 しました。それから、大
 きな埠頭ふ頭があつて、一年
 間に汽船が何千さうも
 出入し、百萬近い人たちが
 乗り降りすることも
 書きました。町の建物
 は西洋風で、並木なみきの美し

青島八

有 交 要

い有様は、お送りした繪葉書ゑがきでわか
 つたことと思ひま
 す。
 満洲國まんしゅうこくが出来てか
 らは、こゝが表玄關げんくわん
 になつて、交通上
 そう重要な所にな
 りました。特別急
 行列車けつごう「あじあ」が、す



客

ばらしい速さで走つて、新京へは八時間餘り、ハルビンへは十二時間餘りで行けます。それに、日本内地へ往復する船が毎日のやうに出て、三日目には門司もつしに着きます。又旅客飛行機で朝立てば、夕方には大阪へ、それから汽車で、翌朝にはもう東京の土がふめるのです。初めロシヤ人がこゝを開いた時、ダ

味

ルニと呼んで居ました。これは遠い所といふ意味で、大連の名も此のダルニから起つたのですが、日本の内地からいへば、遠い所でも何でもありません。ロシヤ時代で思ひ出しましたが、其の頃造られた大きな煙突が、埠頭の近くにそびえて居ます。一時は東洋一とまでいはれた煙突です。設計はしたものの、

計

造

技師

餘り大きくて、ロシヤ人も造りかねて居ましたのを、當時こゝに来て居た日本の若い技師が引受け、見事に造り上げて、皆をあつと驚かしたといふことです。

其の頃、日本人は數へる程しか住んで居なかつたのですが、今では十何萬人にもなり、滿洲人の間にも、日本語がだんく廣まつて行きます。

湖少

浴

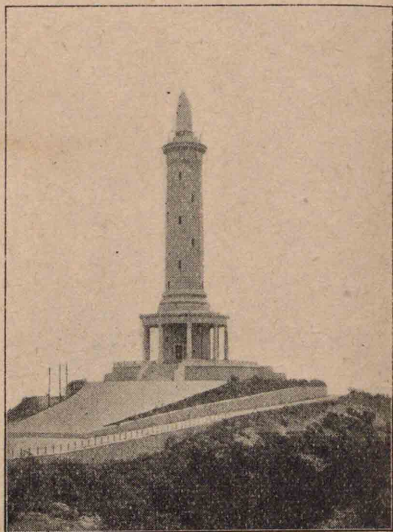
昨日も市場を見に行かうとして、道がわからなかつたので、遊んで居た滿洲人の子供に尋ねますと、日本語ではつきりと教へてくれました。大連には、星浦ほしがうらといふ海岸公園があります。滿洲は川も湖も少いので、奥地に住んで居る人たちは海が珍しく、夏はこゝへどつと押寄せて、盛に海水浴をします。西洋人も大勢

箇

豆

来て、色とりどりのテントや海水着で、海岸は花が咲いたやうです。満洲は雨が少く、私がこゝに来てから二箇月になります。其の間ほとんど雨らしい雨は降りません。降つても、すぐからりと晴上つてしまひます。ぱさくした赤つぽい土ですが、高粱と大豆はゆたかにみえます。

登高



此の間、遠足で旅順へ行きました。さうして、白玉山の表

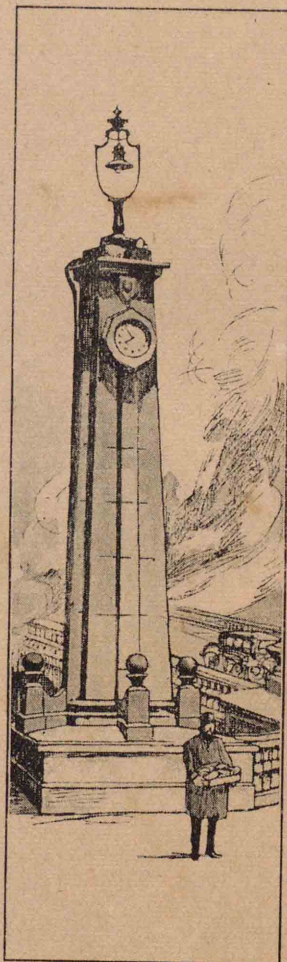
忠塔を仰いだり、二百三高地に登つたりして、日露戦争當時の勇ましい話を聞きました。其の話は、又次の時お知らせしませう。では、皆さん、元氣で居て下さい。さやうなら。

年 月 日

木村正一

四年生の皆様へ、

第五 朝の大連日本橋



時計

橋の時計は八時に近い。
其の下に、

老

老いたロシヤ人が、
パン箱を胸に下げて立つてゐる、
敷石を見つめたまゝ、
動かうともしない。

勤

出勤を急ぐ人たちが通る、
勢よくステツキを振りく、
靴音を立てて。
すれ違ひに

靴

轉

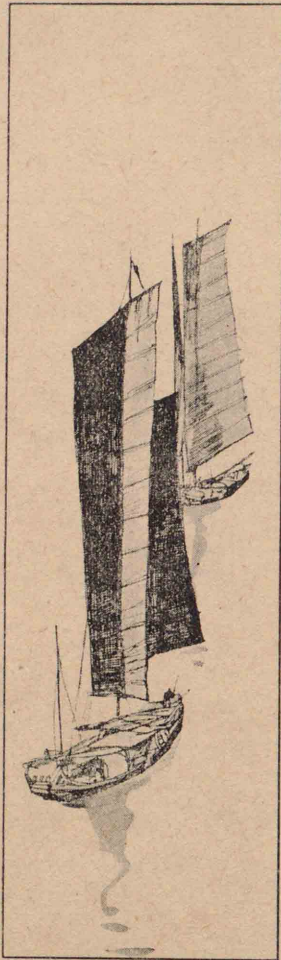
自動車^{自動車}が来る。
 小僧^{小僧}さんの自轉車^{自轉車}が後に續く。
 電車^{電車}が
 ごうくくと走つて来る。

炭石

橋^橋の下を、
 鐘^{かね}を鳴らして貨物列車^{貨物列車}が行く。
 石炭^{石炭}を山程積んで、
 白い煙^煙を

灰

橋^橋の上に吹散らしながら。
 埠頭^{ふ頭}の方は
 煙^煙やもやで灰色にかすんでゐる。



ロシヤ町波止場^{波止場}の海が、
 赤煉瓦^{れんが}の建物^{建物}のすきから見えて、

ジャンクが
静かに浮かんで居る。

第六 くりから谷

木曾義仲都へ攻上ると聞きて、平家はあわて討手をさし向けたり。

大將平維盛は、十萬騎を引連れ、越中の國となり山に陣を取る。義仲は五萬騎を引連れ、これと同じくとなり山のふもとに陣を取る。

騎

兩軍互に押寄せて、其の間わづかに三町ばかりとなれり。夜に入りて、義仲ひそかに味方の兵を敵の後に廻らせ、前後よりどつとどきの聲をあげさせたり。不意を討たれて、平家の軍は、上を下への大さわぎ、弓を取



失

る者は矢を取らず、矢を取る者は弓を取らず、人の馬にはおのれ乗り、おのれの馬には人が乗り、後向きに乗るもあれば、一匹の馬に二人乗るもあり。暗さは暗し、道はなし。平家の軍は逃場を失ひて、後のくりから谷に、なだれを打つて落入りたり。

親も落つれば其の子も落ち、弟も落つれば兄も落ち、馬の上には人、人の上には馬、重なり重なつて、さしもに深きくりから谷も、平家の人

馬にてうづまれり。

大將維盛は、命からぐ加賀の國へ逃げのびたり。

第七 萬壽姫 まんじゆのひめ

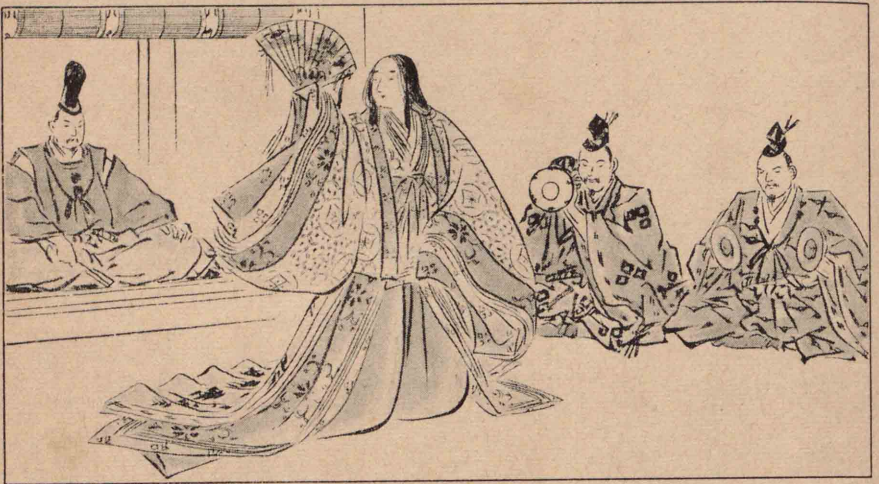
舞

みなものよりとも源頼朝が、つるがをが鶴岡のはちまんぐう八幡宮へ舞を奉納する事になつて、舞姫を集めました。十二人の中、十一人まではありましたが、あとの一人がありません。困つて居る所へ、御殿に仕へて居る萬

品 殊

壽がよからうと申し出た者がありました。
 頼朝は一目見た上でと、萬壽を呼出しました
 が、顔も姿も美しく上品に見えましたので、さ
 つそく舞姫にきめました。萬壽は當年、やう
 やく十三、舞姫の中では一番年若でした。
 奉納の当日は、頼朝を始め舞見物の人々が、何
 千人ともなく集りました。一番、二番、三番と、
 十二番の舞がめでたくすみましたが、其の中
 で殊に人のほめ立てたのは、五番目の舞でし

幸國八



た。此の時には頼朝もお
 もしろくなつて、一しよに
 舞ひました。其の五番目
 の舞を舞つたのが、かの萬
 壽姫であつたのです。
 翌日、頼朝は萬壽を呼出し
 て、
 「さて、此の度の舞は
 日本一の出来であつた。

望

お前の國はどこ、又親の名は何と申す。は
うびは望にまかせて取らせるであらう。
と言ひました。萬壽は恐るく、

「別に望はございせんが、唐絲からいとの身代りに
立ちたうございます。」

情 變(変)

と申しました。これを聞くと、頼朝の顔色は
さつと變りました。變るも道理、これには深
い事情があつたのです。

それより一年ばかり前の事です。木曾きそ義仲よしなか

晝

の家來手塚てつかのた太郎らうみつもり光盛の娘は、頼朝に仕へて居
りましたが、頼朝が義仲を攻めようとするの
をさとつて、義仲の所へ知らせました。義仲
からはすぐ返事があつて、すきをねらつて、頼
朝の命を取れ。と、木曾の家に傳はつて居た大
切な刀を送つてよこしました。

光盛の娘は、其の後、晝夜頼朝をねらひました
が、少しもすきがありません。かへつて、はだ
身はなさず持つて居た刀を見つけられてし

まひました。其の刀に見おぼえがあつた頼朝は、さあ、此の女にはゆだんが出来ぬといふので、石のらうに入れてしまひました。唐糸といふのは此の女のことでした。

唐糸には、其の時十二になる娘がありました。それが萬壽姫で、木曾に住んで居りましたが、風のたよりに此の事を聞いて、うばを連れて鎌倉かまくらをさして下りました。二人は野を過ぎ山を越え、なれない道を一月餘りも歩き続け

祈

て、やうやく鎌倉に着きました。

先づ鶴岡の八幡宮へ參つて、母の命を助け給へど祈り、それから頼朝の御殿へ上つて、うばと二人でお仕へしたいと願ひ出ました。かげひなたなく働く上に、人の仕事まで引受けるやうにしたので、萬壽々々と、人々にかはいがられました。

さて萬壽は、誰か母のうはさをする者は無いかと氣をつけて居ましたが、十日たつても二

十日たつても、母の名を言ふ者はありません。あゝ、母はもう此の世の人ではないのかと、力を落して居ました。

或日の事、萬壽が御殿の裏へ出て、何の氣もなくあたりを眺めて居ますと、小さい門がありました。そこへ下仕の女が来て、あの門の中へ、はいつてはなりませんと申しました。わけを尋ねますと、

「あの中には石のらうがあつて、唐絲様が押

込められて居ます。」

と答へました。これを聞いた萬壽の驚と喜は、どんなであつたでせう。

それから間もなくの事です。或日、今日はお花見といふので、御殿は人ずくなでした。萬壽は、其の夜ひそかにうばを連れて、石のらうをたづねました。八幡様のお引合はせか、門の戸は細めにあいて居りました。うばを門のわきに立たせて置いて、姫は中にはいりま

した。月の光にすかして、あちらこちら探しますと、松林の中に石のらうがありました。萬壽がかけよつて、らうのとびらに手をかけますと、「誰か」とらうの中から申しました。

萬壽は格子の間から手を入れて、「おなつかしや、



繪圖八

母上様。木曾の萬壽でございます。」

「何、萬壽。木曾の萬壽か。」

親子は手を取合つて泣きました。やがて、うばをも呼んで、三人は其の夜を涙の中に明かしました。

これから後、萬壽はうばと心を合はせ、折々らう屋をたづねては、母をなぐさめて居りました。さうして、其の明くる年の春、舞姫に出ることになつたのでした。

孝

親を思ふ孝子の心には、頼朝も感心して、石の
 らうから唐糸を出してやりました。二人が
 互に取りすがつて、嬉し泣きに泣いた時には、
 頼朝を始め居合はせた者に、誰一人もらひ泣
 きをしない者はありませんでした。
 頼朝は唐糸をゆるした上に、萬壽にはたくさ
 んのはうびを與へました。さうして、親子は
 うばもろともに、喜び勇んで木曾へ歸りまし
 た。

秋

第八 晚秋

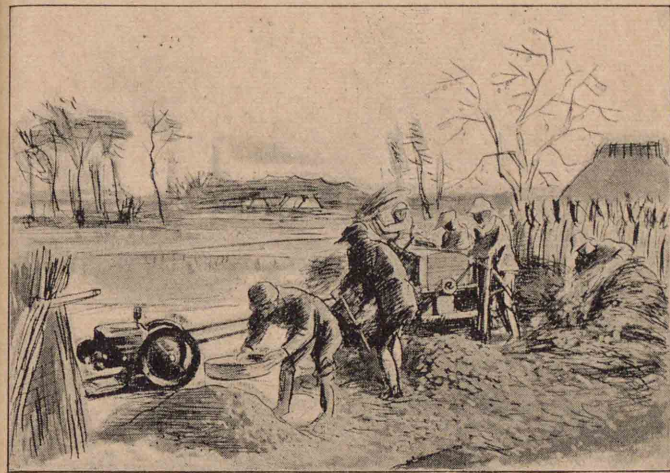
真青

朝は霜だ。屋根も、垣根も、小道も、小道に落散
 つた木の葉も、真白である。
 空は真青にすんで、朝日がやがて野ら一面を
 明かるくする。
 けた、ましく、もすが鳴く。
 たんぼはもうなかば以上刈取られて、おくて
 だけが、こゝかしこに残つてゐる。さうして、

穀脱

快痛

霜の消える頃から、組合の脱穀機の音が、あたりの静かさを破つて景氣よく聞えて来る。



村でこれ程痛快な仕事があらうか。耕して、植ゑて、刈つて、干すまで、ほとんど一本々々手にかけて稲が、此の機械で見ると片附けられて行く。稲かけから運ばれた稲束の山が、片

陽太

梢

端からへつて、後には藁わらの山が積まれ、前にはかき出されたもみが、黄金がねの小山をきづく。朝の霜も忘れたやうに、眞晝の太陽が輝いて、日なたに敷いたむしろの上には、猫がほかほかと暖さうに眠つてゐる。道端の枯れた草むらの底から、かすかに、ごくかすかに、蟲の音が聞えるやうに思ふのは、空耳であらうか。大ていの物は枯れて茶色になつてゐる中に、梢にすゞなりの柿が、赤々と照つてゐる。ゆ

實 菜根

ずの實がみづくしく金色に輝いてゐる。大根や菜種の葉の緑が生きくくと畠に續いてゐる。

午後になると間もなくうすら寒くなる。長く黒く引く物のかげが次第にうすれて、太陽は曇るともなく輝きを失つて行く。四時を過ぎればもう夕方だ。弱々しい日が遠い山の端にかゝる。

日が落ちて、西の空は夕ばえが一きは美しい。

演

垣根に咲残つた二三りんのコスモスの花が、夕やみにかすかに浮いて見える。どこかで、たき火のほひがする。やがて、あたりはやみに包まれて行く。

第九 大演習

(一)

ぱかくくくと馬のひづめの音がして來たと思ふと、騎兵の一隊が、勇ましく私たちの前

湯

を通り過ぎました。

軍隊が今夜此の町を通るので、私は、おかあさんに連れられて、夕方から湯茶接待所^{せったいじょ}へ手傳ひに來たのでした。

やがて、又ごうくくとすさまじい音を立てて、數臺の戦車が來ました。ものすごい地ひびきに驚いて、町の人々は皆飛出して來ました。續いて歩兵が近づいて來ました。

ちやうど接待所の前で、隊長が二十分間きり

臺(台)

團婦

けい。」と號令をかけました。兵隊さんは、やれ嬉しやとばかり、私たちの前へ押しかけて來ました。

「ごくろうさま。お疲れ
でせう。」

といたはりながら、在郷軍人や、婦人會や、女子青年團の人々が、並んで麥湯をついで上げて居ます。ほこ



筒

りと汗で真黒になつた兵隊さんが「此の水筒にも入れて下さい。」これにも。これにも。と出されるので、私たちは、いそがしくて目がまはるやうです。

かうして、後から後から来る兵隊さんを迎へて、とう／＼夜の十一時頃まで働きました。

(二)

銃聲

夜の明けぬ中から、北の方で銃聲が聞えました。私たち女子の組も、先生に連れられて、大

観

演習の拜観に出かけました。

飛行機が勇ましい音を立てて、數臺飛んで來ました。時々、耳をつんざくやうな大砲の音がします。其の度に、早く飛んで行つて見たいやうな氣がしました。

今朝は寒い北風が吹きまくり、たんぼの水たまりにはうすい氷さへ張つて居ます。拜観に來た人々は、皆外たうのえりに首をうづめて居ました。中には、たき火にあたつて居る

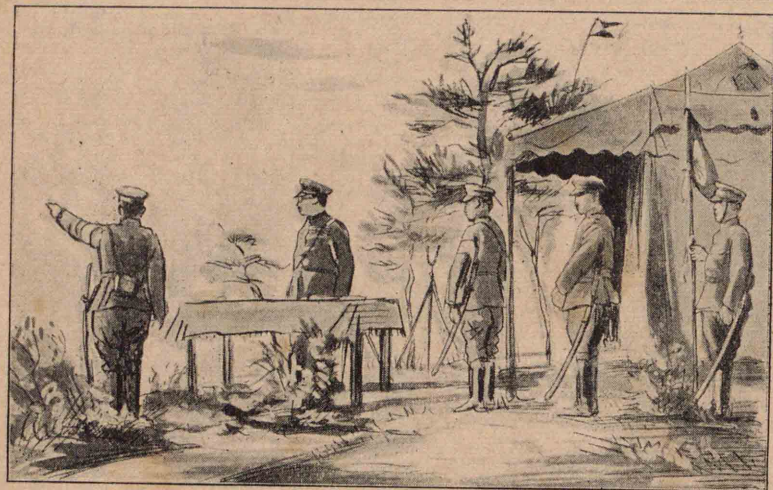
帥

人もありません。野外統監部を遠く望む所で、私たちは拜觀して居ましたが、どこで大砲をうつつて居るのかわかりません。たゞ歩兵が木の小枝や藁わらをせおつて、土手のかげをかけて行くのを見ました。騎兵が土をけつて走るのを見ました。戦の様子は一向わかりません。

やがて、野外統監部へ天皇旗をお進めになつて、御統監の大元帥陛下がお出ましになりました。

敬

況熱



した。最敬禮をしてから仰ぎ見ますと、風當

りの最も強い高地でありながら、陛下は外たうを召されず、熱心に戦況をござらんになつていらつしやいます。それを拜した時、私たちは何ともいはれぬ感じがして、目が涙で一ぱいになりました。

拜觀の人々も、今は外たうを着て居る者は、一人もありませんでした。たき火も何時の間にか消えて居ました。

(三)

今日は、兵隊さんが私の家にも泊るといふので、急いで學校から歸つて來ました。すると、もう兵隊さんは來て居て、兵器の手入をすまし、靴下を洗つたり、靴をみがいたりして居ました。

乾

お湯から上つて、生きかへつたやうだ。と言つて居る兵隊さん、其のそばで、銃や劔を見せてもらつて大喜の弟、夕飯の支度にいそがしいおかあさん。私も、兵隊さんの靴下を火にあぶつて、乾かして上げました。

夕食後、兵隊さんから、新しい兵器についておもしろいお話を聞きました。おとうさんも感心して、

「自分の行つて居た頃とは、すっかり變つた。」

糖

進んだものだ。
 と言はれました。
 翌朝は早く起きて、出発の支度をして上げました。おばあさんは、疲れないうやうにと、焼いたするめや氷砂糖を、紙に包んで上げられました。
 まだ明けきらぬ空に、また、く星を仰ぎながら、おとうさんについて、私も町角までお送りしました。皆が「萬歳々々」と、ちやうちんを上

菊

げるのに答へて、兵隊さんたちも、「萬歳々々」と叫びながら行きました。
 私たちは、其の勇ましい姿を、何時までも見送つて居ました。

第十 菊

木の葉が落ちて
 さびしい庭に、
 咲きのこる

菊の花よ。

今朝もしつとり

露に打たれて、

うつぶした

花の重さ。

そつと起して

立ててやつたら、

指さきに

ついたにほひ。

神のたふとい

御心なのが、

あゝ菊の

たかいにほひ。

第十一 ひよどり越



源氏

平家の軍勢十萬餘騎、一の谷に城をかまへて、源氏の大軍を防ぐ。後は山けはしく、前は海近くして、守かたければ、源氏もさすがに攻めあぐみて見えたり。

背急

大將源義經みなもとのよしつね思ふやう、敵はけはしき山をたのみて、後のそなへを急り居らん。我、敵の背後を突かん。とて、ひそかに三千餘騎を引連れ、後より山を傳ひて、ひよどり越に出づ。見下せば、幾百丈の谷は、あたかも屏風びやうぶを立てたるが

倒

如し。大將試みに數匹の馬を追落したるに、或はころびて倒るゝもあり、或は足を折りて死ぬるもあり。されど、三匹は無事に下り、身ぶるひして立上れり。

大將これを見て、乗手が用心するならば、馬も



岩

けがはなかるべし。いぎ進め。義經を手本にせよ。とて、真先にかけて下れば、三千餘騎、馬を並べてかけ下る。小石まじりの砂なれば、流るゝやうにすべること二町餘にして、やゝ平なる所に下り着きぬ。

されど、これより下、十四五丈ばかりは、こけむしたる岩石、壁の如く突立ちたり。今は先へも進まれず、後へひかんやうもなし。兵ども皆顔を見合はせ、たゞあきれ居たるに、佐原十

幸國八

行

郎義連進み出で、我等にはかゝる所も平地に同じ。進めや。とて、真先にかけて進めば、三千餘騎も續いて下る。聲をしのばせ、馬をはげましつゝ、なだれの如く下るさま、人わざとも思はれず。

下るやいなや、三千餘騎、一度にどつとときをあげて、平家の城に火を放つ。敵は果して不意を討たれ、あわてふためきつゝ、船に乗りて、皆散りぐゝに逃行きたり。

第十二 振子時計

イタリヤのピサの町に夕もやがこめて、日が静かに落ちて行く頃でした。

ガリレオといふ學生が、この有名な大寺院へお参りをしました。寺院の中は、もううす暗くなつてゐました。ちやうど今、番人がランプに火をつけたばかりのところでした。天井てんじやうからつるしてある此の大きなランプが、

ふどガリレオの心をとらへました。

「おや。」

と思ひながら、彼はそこに立止つて、じつと見つめました。

つるしたランプは、静かに左右へ動いてゐます。それは、つい今しがた、番人が火をつけるために手を觸れたからです。ガリレオが不思議に思つたのは、其のランプの動き方でした。左から右へ、右から左へと、行つたり來た

觸

脈



りするの、其の一回々々の時間が、どうやら同じであるやうに思はれてなりません。

「何かでためし
てみる方法は

なからうか。」

しばらく考へてみたガリレオは、やがて自分の脈を取つて見ました。

やつぱりさうでした。ランプが一回動くのに脈が二つ打つと、次の動きにも脈は二つ打ちます。驚いたことには、ランプの動きが次第に小さくなつて、後にはかすかにゆれるだけですが、それでも一回の動きに、やはり脈は二つ打つといふぐあひでした。

ガリレオは、急いでうちへ歸りました。さうして、糸におもりを付け、それをつるして、彼は同じやうなことを何べんとなくやつてみま

した。
 おもりを糸でつるして、それを動かすと、おもりは左右へ振ります。其の糸を短くすれば振方が速く、長くすれば振方がおそくなりま
 す。しかし、糸の長さを一米なら一米にきめて置くと、おもり其の物は重くても軽くても、又大きく動かしても小さく動かしても、振る時間は同じです。これを振り子の等時性といひます。

性等

十八歳の學生ガリレオは、此の事を発見したのでした。今から三百六十年ばかり昔の事です。

應 確正

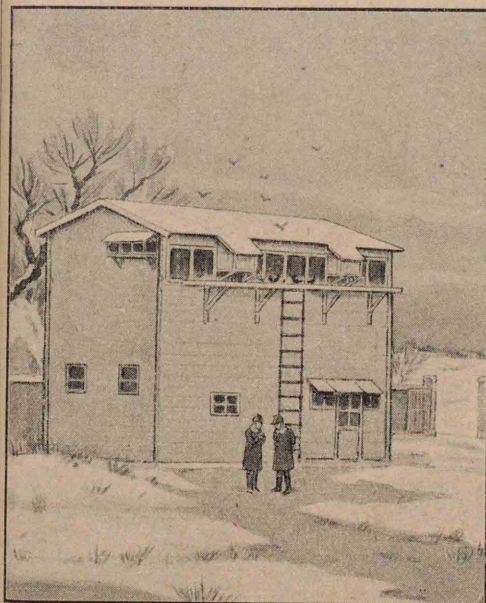
此の発見があつてから七十年餘り過ぎて、オランダのホイヘンスといふ人が、今までにならぬ正確な時計を發明しました。それは、全くガリレオの此の発見を應用したものです。つまり時計の機械に振り子を仕組んだもので、これが振り時計の始りです。

使傳

扱

第十三 小さい傳令使

昭和六年十二月三十一日の夕暮、大石橋守備隊の鳩舎へ、血に染まつた一羽の鳩が飛んで来た。取扱兵がすぐ抱上げて、足の番號を見ると、四日前に、錦州へ向け出發した我が軍に連れられて行つ



書負優

た軍用鳩であつた。信書管は血にまみれ、身には重傷を負うて、息もたえぐであつた。錦州へ向かつた我が軍は、三十日とつぜん優勢な敵軍に出あひ、烈しく戦つた。早く此の事を大石橋守備隊へ知らせようとしたが、電信も電話も敵のためにこはされ、通信はたゞ鳩にたよる外はなかつた。通信紙をつめたアルミニウムの管を鳩の右足に取附けた兵は、しばらく鳩の體にほゝを

すりつけ、途中の無事を祈つた。小さい傳令使は胸をふるはせ、かはい、目で空を見上げて居た。

戦の真最中、鳩は空高く舞上つた。二三回上空に輪をゑがいて飛んで居たが、やがて方向を見定め、矢のやうに飛去つた。

落行く夕日を背に受け、寒空を物ともせず東南をさして飛んで居た鳩は、ふと、たかの一群を見たので、すばやく低空に移つた。すると、

低群

今度は敵軍に発見され、忽ち一せいの射撃を受けた。

射

一弾は鳩の左足をうばひ、一弾は其の腹部をつらぬいた。

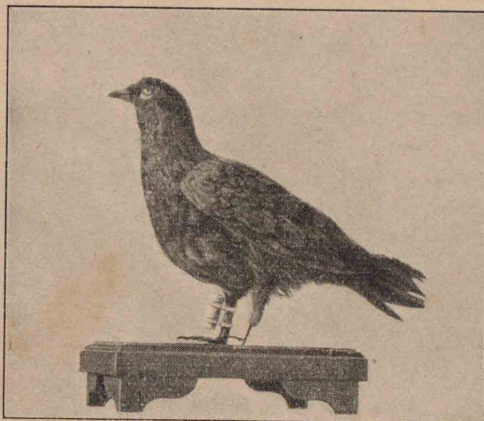
腹弾

此の重い傷にも屈せず、鳩はなほしばらく飛続けたが、遂にたへかねて、とある木の枝に止つた。

遂傷

たまく、其の附近に居た我が軍の兵が、これを発見した。つかまへようとして手をさし

のべると、鳩は再びつばさを廣げて飛上つた。飛去つたあとの木の枝には、いたましくも赤い血が附いて居た。



弱り果てた此の小傳令使は、其の夜どこで休んだことか、翌日になつて、やうやく大石橋の自分の鳩舎にたどり着いたのである。

大石橋守備隊では、さつそく信書管を取りは

づし、手厚くかんごしたが、任務を果して氣がゆるんだのか、鳩は取扱兵の手に抱かれたまま冷たくなつてしまつた。

しかし、此の報告で敵情は明らかになつた。さうして、間もなく我が軍は錦州を占領した。

第十四 自動織機

明治二十三年、東京に博覽會はくらんかいが開かれた時の事である。みなか者らしい一人の青年が、毎

報告 占領 織

館 調 愛

日毎日機械館に来ては、そこに陳列してある機械の前にすわつて、じつとそれに見入つて居るのであつた。掛の人々は、とう／＼彼をあやしい者とにらんで取調べた。調べてみると、氣ちがひでも何でもなかつた。非常な機械好きで、しかも愛國心の強い青年であつた。

彼はそこに並べてある機械を指さして、

「これは皆外國品ばかりではないか。こん

な事で日本の將來をどうする。今に私はりつぱな國産品を作つて、きつと外國品を

追拂つて見せる。」

と、かたい決心を語つた。此

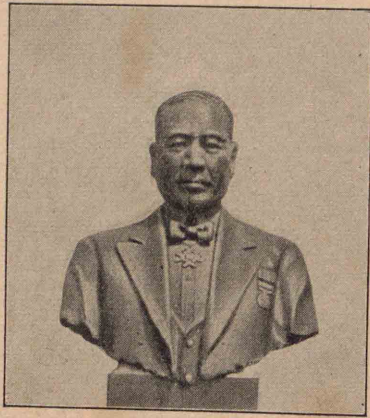
の青年こそ、後に自動織機を

發明して、世界の工業界に名

をとゞろかした豊田佐吉其人であつた。

佐吉は静岡縣のみなかに生まれた。初め大

工として働いて居たが、其の中に織機の改良



縣 改 良

織

を思ひ立ち、ひまさへあれば方々の織場を見て歩いた。時には、機械をこはしたといつて吐られ、村の青年たちからは、男のくせにとあざけられた。かうした苦心を重ねて、佐吉は木製の改造織機を作つたが、じっけん實驗してみると失敗しっぱいであつた。それ見た事かと、人々はあざけり笑つた。しかし、佐吉は何と言はれても、たゞだまつて研究の歩を進めた。博覽會を見に行つたのも此の頃の事であつた。

製

究研

功成

歸つてからの彼の努力どりょくは、一そりめざましかつた。さうして、間もなく木製織機の改造に見事成功した。二十四歳の時であつた。其の後、佐吉はさらに動力を使用する織機の發明に成功して、それが廣く世間に使用されるやうになつた。或會社では、此の織機と外國製の織機とを、一年にわたつてためしてみしたが、ざんねんにも、佐吉の機械は外國製に及ばなかつた。

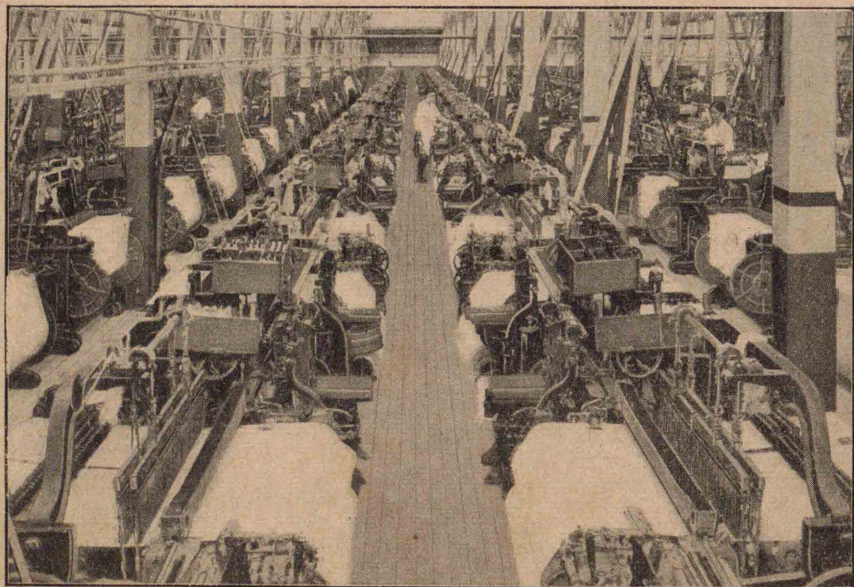
佐吉は涙を流してくやしがつた。さらに三年の後、外國品にまさるものを、どうにか作り上げることが出来た。

しかし、此の成功に満足してしまふ佐吉ではなかつた。彼は、ほとんど其の一生を織機の改良にさゝげた。大正十五年、彼は遂に世界無比の自動織機を發明した。それは、たて絲が切れ、ば自動的に運轉が止り、よこ絲が無くなれば自動的にこれをおぎなふ仕掛にな

比

困 貧

つて居る機械で、一人で四五十臺を取扱ふことが出来る。彼が織機の研究を始めてから四十餘年、氣ちがひといはれ、貧苦と戦ひ、あらゆる困難にたへて、遂に此の成功を見たのである。



發明に對する彼の熱心は、まことに驚くべきものがあつた。朝は誰よりも早く起きて研究室に入り、夜もおそくまで閉ぢこもつて居るので、家族の人は、彼が何時寢たかも知らない事が多かつた。

こんな事もあつた。いつもの如く研究室にはいつた佐吉は、日が暮れても出て來ない、夜なか過ぎてても出て來ない。遂に夜が明けてにはどり鶏が鳴いた。東の空に朝日がのぼつた。家

族のものが心配して、研究室へ行つて見ると、とたんに佐吉は、圖面を片手に勢よく飛出して來た。さうして、一さんに工場へ走つて行つた。

「おい、誰も居ないか。」

と、佐吉は叫んだ。工場はがらんとしてゐる。あとからついて行つた家族のものが、

「今日は元日でございます。」
と言つたので、

「は、は、さうだつたか。」
 と大笑した。
 佐吉は、夜通し考へた事を實さいに作らせよ
 うと思つて、元日とも知らず飛込んだのであ
 った。

第十五 福壽草

福壽草、

床にかざれば、ほんのりと

急に明かるい部屋へやの中。

冬の日、

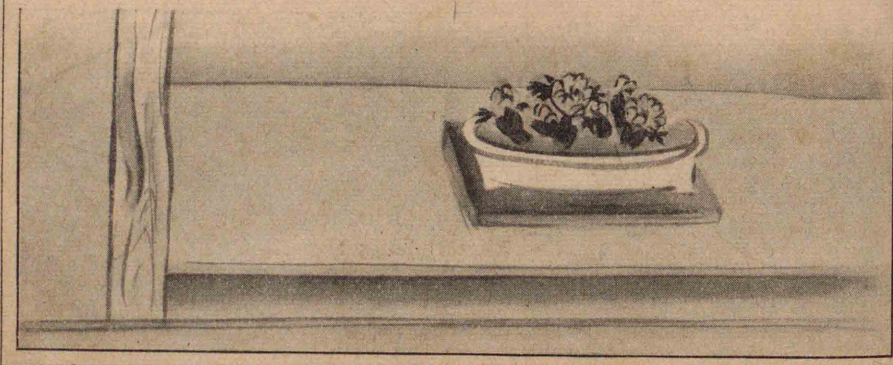
黄色い花はよるこびの

あふれるやうに生きくと。

母とまた、

笑顔かはして、花の數、

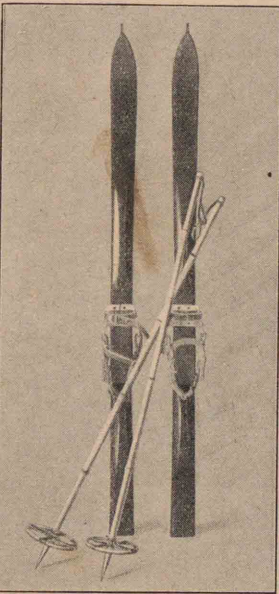
つぼみの數をよんでみる。



笑

第十六 スキー

埋



粉雪が幾日も降續いて、野も山も眞白に埋めつくしてしまつた。僕たちは、毎日々々スキーをはいてかけまはつてゐたが、もう村の近所ではおもしろくなくなつたので、今日は朝から、野田先生に山のスキー場へ連れて行つていたゞいた。

村はづれの辻堂の縁えんに、僕たちが待つてゐると、やがてスキーをかついだ先生がいらつしやつて、にこ／＼しながら、

「やあ、みんな早いね。」

と元氣な聲でおつしやつた。スキー場までは登り道で、五糎ばかりある。雪は一米も積つてゐる。先生はいつも眞先に立たれて、急な坂にかゝると、



「やあ、えい、やあ、えい。」

と、掛聲を掛けて僕たちをはげまされた。から松の林を抜けて小松原にかゝると、誰かが、

「やあ、鬼、鬼。」

と大聲に叫んだ。見ると、大きな鬼が、ちやうど小松の中へ飛込んだところだ。あとには、松の枝から雪がこぼれてゐた。

邊(辺)

小松原を抜けるとスキー場だ。此の邊では、

快

滑

速

止

雪が二米近くもあつて、たゞ一面の銀世界、快い傾斜けいしゃが幾箇所となく並び續いてゐる。

僕たちは傾斜を登り始めた。五十米程登ると、僕はもうたまらなくなつて、眞一文字に滑り下つた。すばらしい速度がついて、スキーがうなる。空氣が耳もとでうなる。一瞬しゆんで谷底だ。急停止して振返ると、仲間はまだずんずん登つて行く。やがて百米も登つたと思ふと、一せいに滑り始めた。速い、速い。見



る見る顔がはつきりして来る。思ひくのあとをつけながら、小鳥のやうに舞下り、雪煙を立てて停止する。中には、ころんで雪に大きな穴をあけ、雪だるまになつて起上る者もある。先生は、二百米も登つて下り始められた。電光形を急がしく見事な滑り振りに見とれ

壯

てみると、もう目の前に來られた。烈しい制動どをかけて急停止をなさる。もうくと雪煙が立つ。雪煙が消えると、先生の笑顔が浮かんで來た。それから、僕たちは何もかも忘れて滑つた。先生は、向かふでジャンプをしてみられる。つばめのやうに空中に舞上つて、二十米から三十米も飛ばれる姿は、いかにも勇壯である。僕たちもやりたいけれども、まだ出來ない。

愉

晝近くなると、山小屋に泊つてゐる人々も來て、にぎやかになつた。上手な人もあるが、中にはころんで、かめの子をひつくりかへしたやうに、ばたくしてゐる人もあつた。雪の上の楽しい晝食がすむと、今度は先生に一人々々滑り方を教へていたゞいた。歸りは、村まで下りきりの愉快な道だ。林を縫つて長距離きよりを滑るのは、楽しいものだ。行きには二時間餘りもかゝつた道を、ほんの一

息で村まで歸つた。

第十七 扇の的

出 的

屋島の合戦に、源氏は陸に陣を取り、平家は海に船を浮かべて相對せり。折しも美しくかざりたる船一さう、平家の方より漕出す。見れば、へさきに長き竿を立て、赤き扇を取附け、一人の官女其の下に立ちて、陸に向かひてさしまねく。

源氏の大將義經つねこれを見て、

「かの扇を射

落す者は無

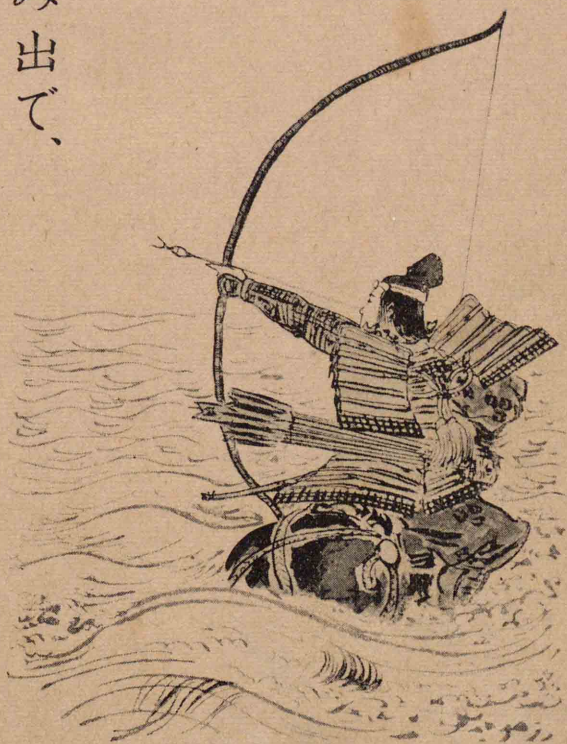
きか。」

一人の家來進み出で、

「那須餘一なすのよいちと申す者あり。空飛ぶ鳥も、三羽

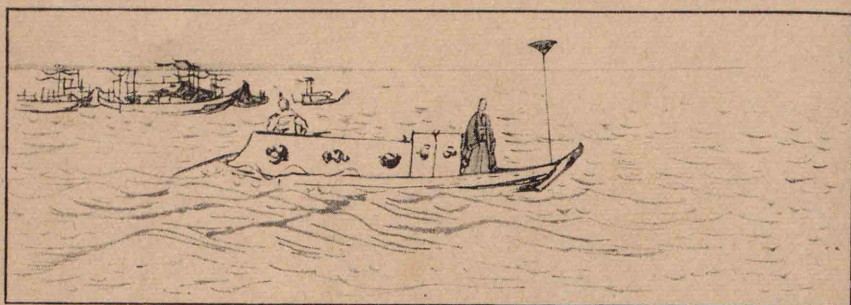
に二羽は、必ず射落す程の上手なり。」

と答へたれば、「それ呼べ。」とて、餘一を召出す。



固

害



餘一は、固くじたいしたれども、ゆるされず。心の中に思ふやう、萬一射損ずるならば、弓切折りて自害せんと、かくごをきめて、馬にまたがり、海中に乗入れたり。

時に風強く波高ければ、船はゆり上げられ、ゆり下げられ、扇は風にひらめきて、いかなる弓の名人も、たゞ一矢にて射落すことはむつ

かしと見えたり。

餘一目を閉ぢ、一心に神に祈りて、再び目を開けば、風や、静まり、扇も少しく落着きて、射よげに見ゆ。直ちに弓に矢をつがへ、ねらひを定めてひようと放つ。

扇は要かなめぎはを射切られて、空高く舞上り、二度三度ひらくとまはりて、さつと海中に落入りたり。

陸には大將義經を始め、源氏の兵つはものども、馬のく

らをたゝきて喜びたり。海には平家の軍勢、ふなばたをたゝきて、どつとほめ上げたり。

第十八 弓流し

義經よしつね馬を海中に乗入れて、烈しく戦ふ折しも、いかなるはずみにか、わきにはさみあたる弓を海中に取落したり。

義經は馬上にうつぶし、むちの先にて、流れ行く弓をかき寄せ取らんとすれば、敵は船中よ



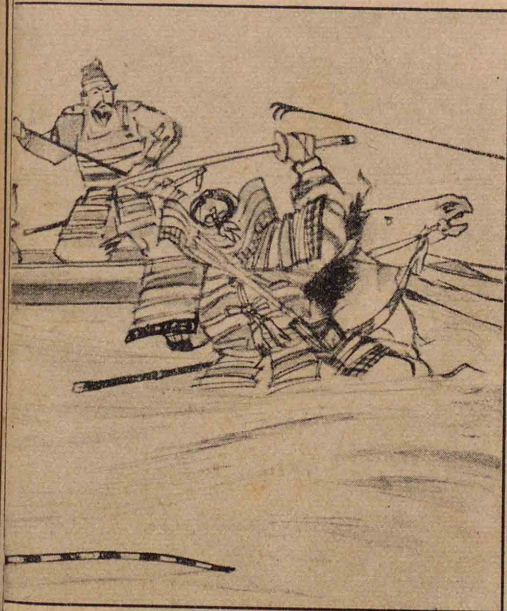
り熊手^{くまて}を以て、義經のかぶとに打ちかけ打ちかけ、引倒さんとす。源氏の兵^{つはもの}ども、

「其の弓、捨て給へ。捨て給へ。」

と口々に言ふ。

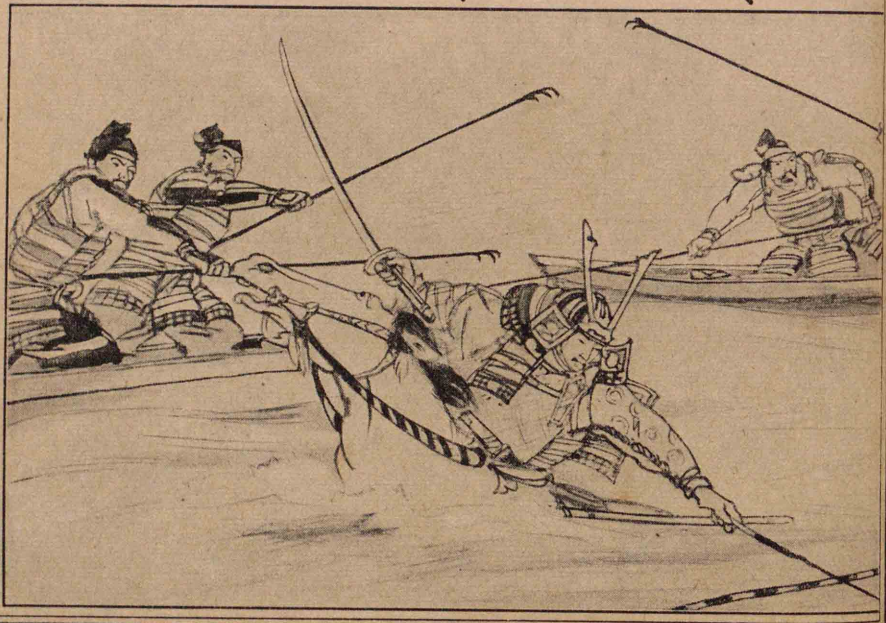
されども義經は、太刀^{タチ}にて熊手を防ぎ、遂に弓を拾ひ上げて陸に上る。家來の者、

太刀



「たとへ、金銀にて作りたる弓なりとも、御命には代へがたし。」

と申せば、義經笑ひて、「弓を惜しみたるにあらず。叔父^{おぢ}爲朝^{たためとも}の弓のやうならば、わざと落しても與



恥

ふべし。弱き弓を取られて、『これが義經の弓なり。』とあざけらるゝは、源氏一門の恥ならずや。

と言へり。

源氏の兵どもこれを聞きて、『まことの大將かな。』と、皆感じ合へり。

第十九 物のねだん

昔、鬼が持つてゐたといふ打出の小槌こづちを、もし

億

人間の世界へ持つて来たとすれば、どうでせう。きつと何億圓、何十億圓といふ高いねだんの物になるに違ひありません。なぜかといへば、打出の小槌は、それで何でもほしい物が打出せるといふことです。かういふちようはうな物は、誰一人ほしがらないものはありません。其の上、打出の小槌は、お話に聞くだけで、我々の手にはいらぬ、非常に珍しい物だからです。

ところで、此の打出の小槌から、同じ打出の小槌を、幾つも幾つも打出したらどうでせう。さうして、世界中の人が皆手に入れたらどうでせう。もう珍しくも何ともありません。めいゝの持つてゐる打出の小槌から、新しいのが幾つでも打出せます。かうなると、打出の小槌は、まるでねだんのない物になつてしまふかも知れませんが。

これはたとへ話ですが、しかし、これと同じやうな事が、我々の生活においても考へられます。

寶(宝)

澤

ダイヤモンドは、寶石の中でも一番かたくて、光澤（ひかり）の美しい物ですから、誰でもほしがります。けれども、ダイヤモンドはわづかしが出ませんから、皆が手に入れるといふことは出来ません。だから、ダイヤモンドは豆粒ぐらゐの大きさの物でも、何千圓、何萬圓といふ高いねだんです。

粒

呼吸 刻

我々は空気を呼吸くそくして生きてゐます。ダイヤモンドは無くてもさしつかへありませんが、もし空気が無かつたら、我々は一刻ひとときも生きてゐられません。空気はこれ程大切な物ですが、しかし我々の住んでゐる所には、どこにでもあります。だから、空気にはねだんがないのです。ちやうど世界中の人が、皆打出の小槌こづちを持つてゐるやうなものです。かう考へると、物にねだんがあるのは、一つに

得 原因

は、我々が其の物をほしがるといふことと、いま一つには、其の物が得がたいといふことが原因になつてゐることがわかります。ところで、同じ品物でも、時にねだんが高くなつたり、安くなつたりします。それはどういふわけでせうか。せり市へ行つて見ると、商人が「さあ、いくら、さあ、いくら」と言ひながら、大勢の人に品物を見せてゐます。すると、大勢の中から「十五銭」

「十七錢」「二十錢」などといふ聲が起ります。もうそれ以上高いねだんを附ける人がないと、其の品物は「二十錢」と言つた人の手にはいりません。つまり其の品物は、一番高いねだんを附けた人に賣られることになるのです。

反

又、これと反對の事があります。同じやうな品物を賣る店が多く並んでゐるとします。品物を買はうと思ふ人は、大ていあつちこつちと店をたづねて、ねだんを問合はせ、一番安く賣る店で買ひます。

此の二つの場合から、かういふ事が考へられます。品物が少くて買ふ人が多い時には、品物のねだんは高くなります。反對に、品物が多くて買ふ人が少い場合には、品物のねだんは安くなります。ちやうど打出の小槌が、ただ一つしかなければ、何億圓といふ高いねだんでせうが、世界中の人が皆持てば、ねだんがなくなつてしまふといふのと同じことです。

供即

佐瀬

かういふ風に、物のねだんは、主として、物を買
ふ方即ち需要じゅえうと、物を賣る方即ち供給くわんとの關
係けいによつて、高くもなれば安くもなるのです。

第二十 廣瀬中佐



とゞろくつゝ音、

丸

貫

飛來る彈丸。

荒波洗ふ

デツキの上に、

やみを貫ぬく

中佐の叫び。

「杉野はいづこ、

杉野は居ずや。」

船内くまなく

尋ぬる三たび、
 呼べど答へず、
 探せど見えず。
 船は次第に
 波間に沈み、
 敵弾いよく
 あたりにしげし。
 今はとボートに

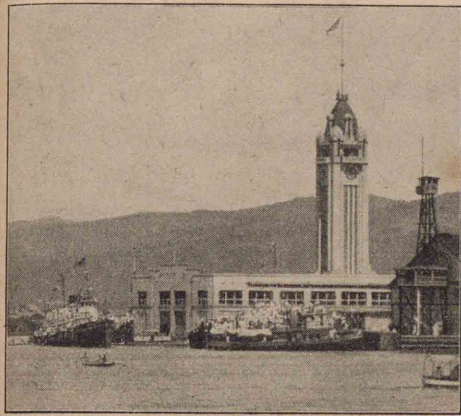
失

移れる中佐、
 飛來るたまに
 忽ち失せて、
 旅順港外、
 うらみぞ深き、
 軍神廣瀬と
 其の名残れど。

第二十一 ホノル、の一日

寄 島

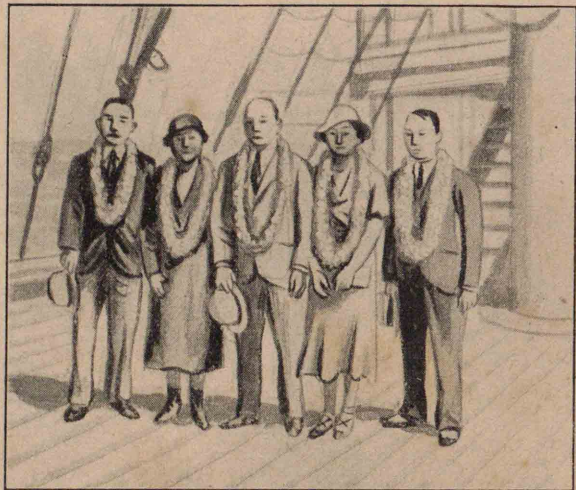
アメリカ行の船は、横濱を出て八日目に、ハワイのホノル、に寄港する。此の間、たゞ水と空ばかり眺めてみた身には、島上の此の美しい都市が、まことになつかしいものに思はれる。



水ぎは近くそびえ立つ塔を望みながら、船が埠頭ふとに近づくと、そこには、もうぎつしりと出迎の人々がつめかけてある。手にく持った

般

美しい花の首かざり、あれを我々の首にかけてくれるのださうな。もと土人が親愛の情をあらはすしるしであつたのが、今ではハワイ一般の風習になつたのだといふ。アメリカ合衆國がっしゅうこくの領土だといふのに、横濱で送られた時と同じ日本語が、こゝでも聞かれる。それもそのはず、出迎



結

の大半は日本人である。中には、日本の着物を着て、帯をきちんと結んだ女の姿さへまじつてゐる。

日本旅館に案内され、風呂を浴びてゆかたに着かへると、一體こゝがどうして外國かと言ひたくなる。そばにはハワイの日本字新聞さへ置いてある。

農漁

聞けば何の不思議もない。ハワイの人口三十八萬の中、十五萬が日本人で、それが農業・漁

従

業・商業を始め、あらゆる職業に従事してゐるのだ。ハワイが今日のやうに發達したのも、ほとんど日本人の力だといつてよいといはれてゐる。此の旅館で出してくれるさしみは、多分日本人の取つた魚であらう。ことによると、御飯にしても、野菜にしても、コーヒにしても、砂糖にしても、パインアップル、其他の果物にしても、みんな日本人の手で作られた物が、使はれてゐるのかも知れない。

多野菜

果物

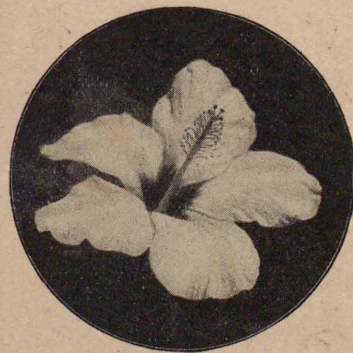
並

映植帯

路



ホノル、は、ほんたうに美しい都市である。いたる所に椰子の木立がある、並木が續く。さつぱりした建物の色と、熱帯植物のこい緑が映じ合ふ。殊に美しいのは、ハワイの花といはれるハイビスカスの花である。家の垣根といはず、公園の並木路といはず、黄に、赤に、白に、咲誇



園圖八

傾

乳牛

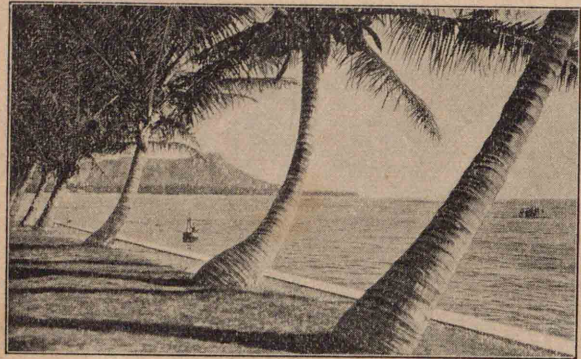
り咲續いてゐるのを見ると、まるでおとぎの國にでも、さまよつてゐるやうな氣がする。ハワイは實に明かるい所である。どこまでも青くすみきつた大空の下には、地上のあらゆる物が、色あざやかに見える。中でもきれいなのは海の色だ。ちやうど眞白な牛乳に、緑の糸のぐでも流し込んだやうである。ハワイは「夕日なき島」といはれてゐる。日が西に傾いても、日本ならばまだくと思はれ

普

る時分、こゝではあつといふ間に日が落ちてしまふからである。さうして其の頃から、雲の色どりが何ともいへぬ美しきを見せる。夜になると、大空に星が一ぱい照輝く。「星低き國」といふのもハワイのことである。星の一つ一つが大きく見えるばかりか、我々が普通星形といつてゐる形の通りに見える。ハワイには支那人も西洋人もあるが、我々に珍しいのは、色の赤黒い、背の高い土人である。

質 | 音 | 文

寝



體が大きいのに、性質がごくおとなしく、しかも音楽が大好きである。有名なワイキ、の海岸は、今日、文明を誇る公園地帯となり、海水浴場となつてゐるが、昔は、月の明かるい晩など、土人の群が、椰子の木かげで、あはれつばい歌に合はせて、一夜ををどり明かしたさうである。

夜、旅館の寢臺に横たはりなが

ら、どこからか聞えて来る支那人の聲や、土人の歌に耳を傾けてみると、やはりこゝは外國だといふことを、しみじみと感ずる。

第二十二 コロンブスの卵

コロンブスがアメリカを發見して歸つた時、イスパニヤ人の喜んだことは非常なものでした。

一日祝賀會の席上で、人々が代るぐゝ立つて、

航

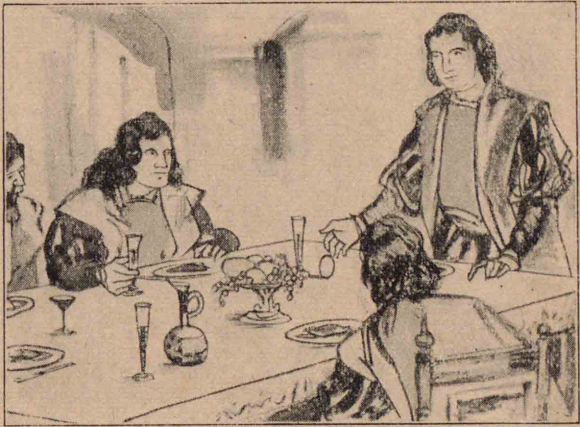
コロンブスの成功を祝しますと、一人の男が、「大洋を西へぐと航海して、陸地に出あつたのが、それ程の手がらだつたらうか。」と言つて冷笑しました。

これを聞いたコロンブスは、つと立つて、食卓の上のゆで卵を取り、

「諸君、試みに此の卵を卓上に立ててごらんなさい。」

と言ひました。人々は、何のためにこんな事

諸



を言出したかと思ひながら、やつてみました
 が、もとより立たうはずはご
 ざいません。
 此の時コロンブスは、こつん
 と卵の端を食卓に打ちつけ、
 何の苦もなく立てて申しま
 した。
 「諸君、これも人のした後では、何のざうさも
 ない事でございませう。」

第二十三 漁村

(一) 船が出る

かん、かん、かん、かん。
 すみきつた朝の空気をふるはせて、板木ばんぎが鳴
 りひびく。
 「船が出るぞう。」
 「おうい。」
 大声で呼びかはし、男も女もはだしで、濱へ下

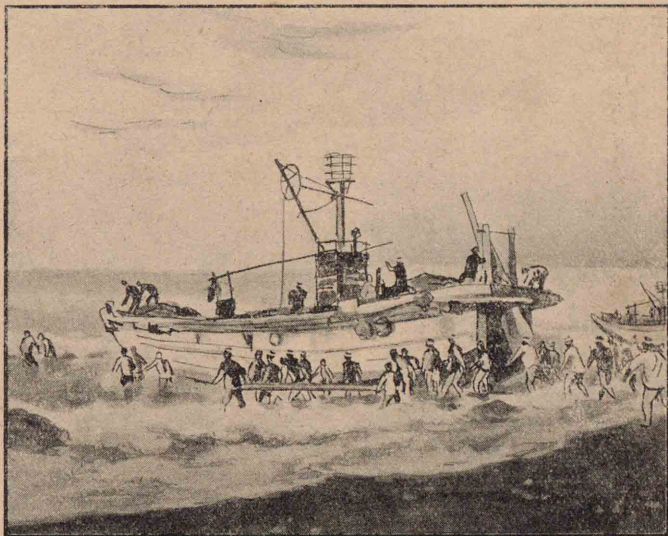
りて行く。あたりはまだうす暗い。黒々と

大きな體を横たへてゐる船のかけで、幾箇所にもたき火が始められる。

「やつさ、やつさ。」

勇ましい掛聲で、船は忽ち海へ引下される。水に浮く。機械が掛る。

「ど、ど、ど、うつ。ど、磯にくだける波が、船を陸へ押



磯

身

上げようとする。さを張が、満身の力をこめてさをを突張る。

影直

二番瀬を越すと、折からのぼる太陽の光を浴びて、長くあとを引きながら、一直線に沖へ。見るく、其の影は小さくなつて行く。

(二) 大れふ

僕等は、はしけに乗つて、ぐんぐん沖へ出た。今日はすばらしい風だ。僕は文治とへさきにすわつて、船が上ると體を浮かすやうに、船

が下ると體を沈めるやうにしてゐた。

「いさん、濱屋の船だよ。」

文治が指さしたので、見ると船が一さう走つてゐる。屋號を染抜いた小旗も見える。子供が一人、船の真中に居る。

「あれは、きつと濱屋の源治君だよ。源治君、源治君。」

と大聲に呼びながら、文治が立上りかけると、ともに居た船方が、

「あぶない。」

とどなつた。

後を振り返ると、もう矢島の岬も見えない。目のとく限りは、着物でも染まるやうな眞青な水だ。

やがて網場へ來た。何十さうといふ船が、今思ひくに網を張つてゐるところだ。白波を立てながら、右往左往して、まるで戦場のやうである。僕等の網船は、もう網をたぐり始

岬 網 右

めた。

「さあ、のう。」

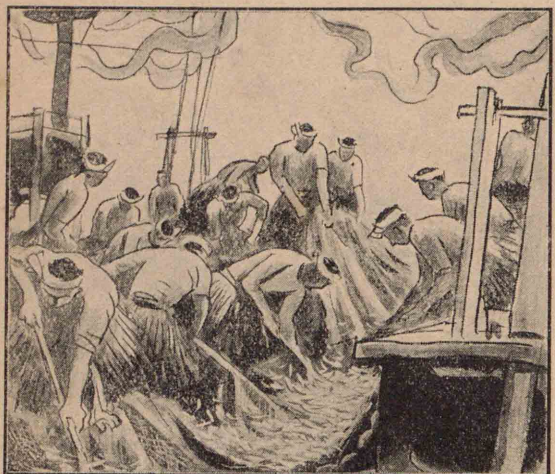
と、一人が音頭おんどを取ると、大勢の船方が、みんなこれに合はせて、

「やつさ、やつさ。」

と網をたぐる。誰も彼も、赤銅色しゃくどうのはだから玉の汗を流してゐる。

網がつぼまつて来たところで、網船は、僕等の乗つてゐる船を呼んだ。

築



網船二さうの間へ、まつすぐに乗入れる。大
きなたもで、網からいわしをどん／＼僕等の
船へ上げる。見る／＼船の中には、いわしの
山が築かれる。いわしの
重みで、船がぐつと傾く程
だ。

僕等の船は、左右の網船か
らさをで押されながら、網
の外へ出る。出ると、機械

威 路

を一ぱいに掛けて家路へ急いだ。何時の間に立てたのか、へさきには、大れふを知らせる真紅の吹流しが二本、威勢よく風にひるがへつてゐた。

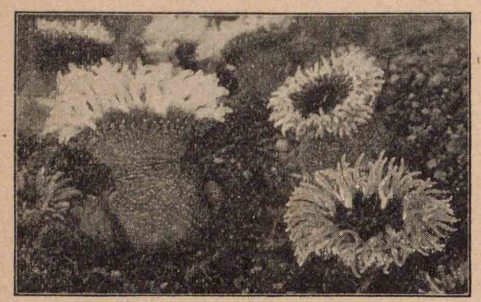
第二十四 水族館

昨日、おとうさんと一しよに、水族館へ行きま
した。

入口のそばに池があつて、そこに甲の長さが

一米もある「うみがめ」が居るのには、びっくり
しました。

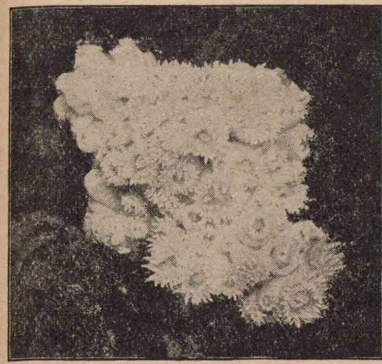
中へはいつて、先づ目に着いたのは、室の窓ぎ
はに幾つも並べてあるガラスの箱でした。



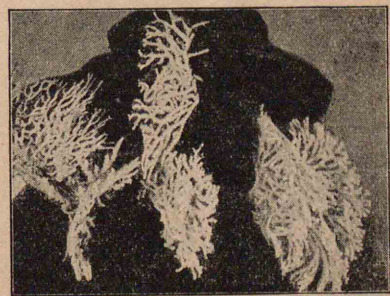
きれいな海水が、細かいあわを立てながら、どの箱にも注いで居ま
す。さうして、赤や、黄や、緑の何と
もいへない程美しい物がはいつ
て居ました。

觸

それは、みんな海に居る動物でし
た。緑色のすき通るやうな觸手
が菊の花のやうに美しい「いそぎ
んちやく」だの、檜ひのきの葉のやうで、黄
色や、えび茶色をして居る「いそばな」だの、ちや



うど小さい金仙花がむらがり
咲いたやうな「いぼやぎ」だの、星
形で、赤や青色をしてゐる「ひと
で」だの、どれもこれも、目のさめ



減

る程美しい物ばかりでした。

「たつのおとしごも居ました。尾を何かにき
りきりと巻附けて、あの馬のやうな顔を、うつ
向き加減に、こつくりこつくり動かして居ま
す。これがもし目をつぶつて居たら、居眠を
して居るといひたいところですが、圓い目を
見張つて居るので、すから、どうしても何かひ
どく考へ込んで居るとしか思はれません。
「一體、何をあんなに考へて居るのかなあ。」

とひとり言を言つたので、おとうさんがお笑ひになりました。

「くらげ」も居ました。すき通つた寒天のやうな體から、腕が幾本も出て居ます。時々體をしぼるやうにして、すい〜と浮上ります。

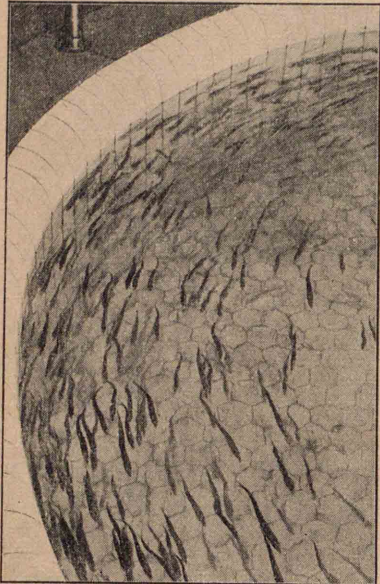
「あゝいふ風に體をしぼると、中の水が勢よく下へ出る。其の勢でくらげは運動するのだ。」

と、おとうさんはおつしやいました。

徑

沿

此の室の中央に、直徑四五米ぐらゐの圓い池があつて、中にたくさんの「いわし」が泳いで居ました。約二千匹は居るだらうといふことでした。此のたくさんの「いわし」が、池のふちに沿うて、みんな同じ方向に泳いで居ます。

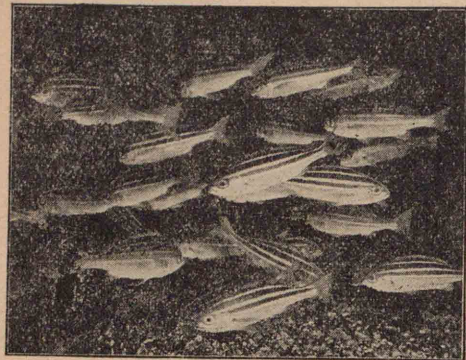


一匹として反對の方向へ進むのはありません。
「みんな同じ方へ向

かつて泳いで居ますね。」
 「さうだ。さうして、よく見なさい。外側を廻つて居るものも、内側を廻つて居るものも、揃つて同時に進んで居るだらう。つまり外側に居るものは、大急ぎで進んで居る。内側に居るものは、ゆつくりと動いて居る。それで、ちやうど内側も外側も揃つて進めるのだ。」

次の室には、ガラスを張つた大きな窓のやう

眼



なものが順々に並んで居て、其のガラス越しに、種々の魚の泳いで居るのが見られました。たひも居ました。いさきも居ました。「あち」
 「たこ」其の外名前を始めて聞く魚も、たくさん居ました。

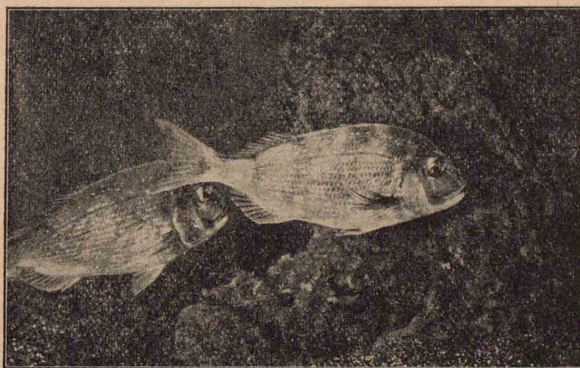
「たひ」は何といつても堂々たる魚です。五六十糎もあるのが、
 いうくと泳いで、外の魚などは眼中カンキョウにないといった風をし

點(点)

て居ます。

光線のぐあひで、背中のあたりが

點々と空色に光るのは、ほんたうにきれいでした。



「あぢ」は水中に居ると、實に氣のきいた魚です。胸びれをすつと左右に張り、背びれしりびれを上下に張つて進む姿は、あの

輕

さかな屋の店先で見るとは全く違つた感じ
です。輕快な軍用飛行機といつたかつか

似

うです。

それと似て、少し様子の違ふのが「はうぼう」です。高い所

から低い所へ下りる時、其の

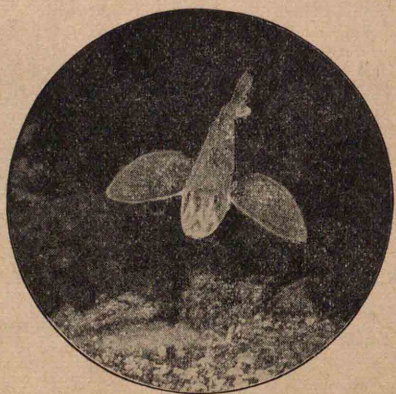
胸びれは扇のやうに廣がり

ます。さうして、ちやうど飛行機が空中を滑

走するやうに、手ぎはよく水を切つて下りて

來ます。下へ下りると、胸の所に足のやうな

ものがあつて、それでのこくく歩くから不思



走 | 滑

平

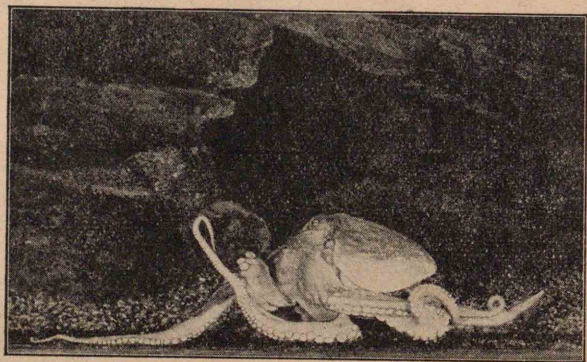
議です。

「かれひ」は、平たい體をくねらせて泳ぎます。外の魚は腹を下に、背を上にして泳ぎますが、「かれひ」は何時でも體を横にしたまゝ、くねつて行きます。おもしろいのは、「かれひ」が砂の中にもぐつて居る様子です。其の平たい體に、ちよつと砂をかぶると、上から見ても、どこに居るか見當が付きません。よくよく見ると、二つの目だけを砂の間から出して、きよろ

巧 妙説

りきよろりと目玉を動かしながら、外を眺めて居ます。ちやうど潜水艦が水中にもぐつて、潜望鏡だけを出して居るかつかうです。

「たこ」は、すばらしい活動をしませす。岩や砂の上を歩く時は、八本の長い足を巧みにくねらせ、頭を横に傾けながら進みます。おとうさんの説明によると、「たこ」といふ物は實に妙な物



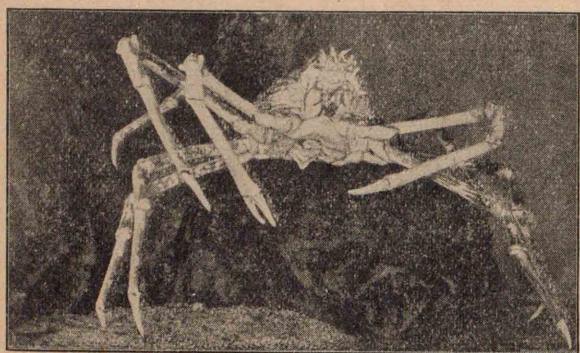
胴

で、あの普通に頭といつて居る所が實は胴クウで、
胴から足が出ないで、頭から足が出て居るの
ださうです。

「だから歩く時、あゝいふ風に頭が傾いて、へ
んなかつかうに見えるが、あれは胴クウなのだ
から、別に不思議はないのだよ。」

其の中に「たこ」が泳ぎ始めました。八本の足
を一つに揃へ、胴を先頭に、まるで矢のやうに
進みます。これが「いかだ」ともつとすばらし

具



いさうです。

「たかあしがに」といふ大きなかにが居ました。
左右の足を一ぱいにのばしたら、三米ぐらゐ
はあるでせう。足が長い割合
に、甲は小さいのですが、おもし
ろいのは其の口の所です。口
には色々込入つた道具ドウが附い
て居ますが、其の上の所に小さ
い觸角があつて、それがちやう

終始

どお人形さんのかはいらしい両手を思はせ
ます。しかも其の両手は、ピアノでもひくや
うに、始終活動して居ます。

「かには音楽家ですね。」

と、私が言つたので、おとうさんも、そばに居た
よその人たちも、みんな一度に吹出しました。

早春

第二十五 早春

枯野の雪は、

まだ消えてしまはないのに、

ごらん、其の枯草の中に、

少しの青いものが、

ひそかに芽ぐんでゐるのを。

日かげのみぞは、

まだこぼつてゐるのに、

ごらん、日あたりの水の面に、おもて

二三匹の目高が、

ついく泳いでゐるのを。

花も咲かず、

鳥も鳴かないけれど、

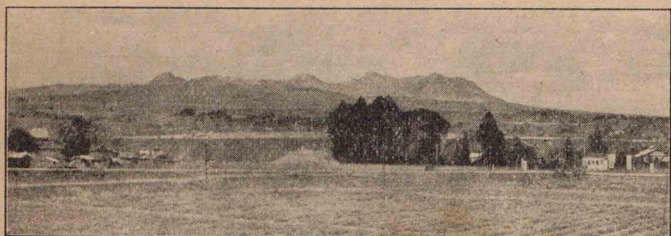
ごらん、すべてのものの上に、

春が

そつとしのび寄つてゐるのを。

第二十六 清水しみづトンネル

關(関)



三月といへば春はまだ浅いが、汽車の窓には
關東平野がうらゝかに晴れて居る。ところ

どころに梅が咲き、麥の緑があざやかに
廣がる。雜木林の梢が、ぼつと煙つたやうに
見えるのも、何となく春らしい眺である。

高崎たかさきを過ぎる頃から、遠山の姿が美しくなつた。
右の窓に、春の雪をいたゞいて遠くすそを引くのは、赤城あかぎ

山であり、左の窓に續くのは、榛名^{はるな}其の他の山
山である。

町を過ぎ、村を過ぎ、汽車は何時の間にか利根
川に沿うて北へ進んで居た。平野がつきて、
山が次第にせまつて來た。右も山、左もやが
て山を見上げるやうになると、利根川も眼下^{かしか}
に細くなつて、右に左に屈曲^{くつきやく}する。幾度か鐵
橋を渡り、短いトンネルを過ぎた。さうして、
谷はだんくく深まつて行つた。

白 境

泉 殘 頂 逆

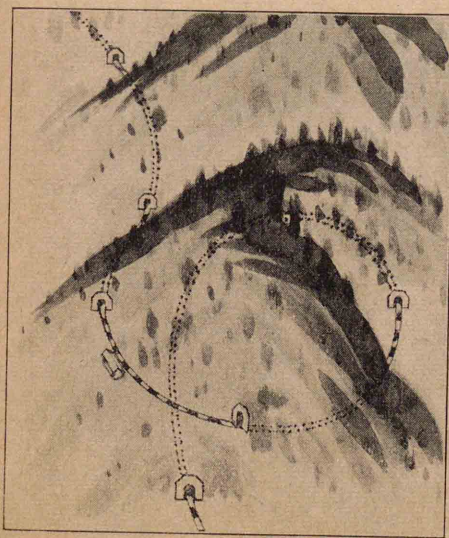
山は、奥へ進むにつれて高くなつた。時にや
や遠く、金山白雪を着て春の日に銀色に輝き
ながら、そびえ立つのを望んだ。縣境^{あがた}の山々
であらう。



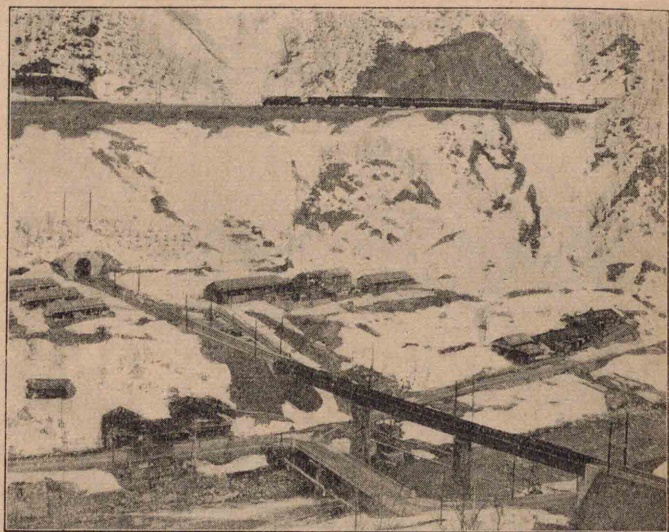
谷間に沿うて所々に山
村があり、温泉場がある。
残雪は、山の頂から中腹
にかけてまだらに見える。何だか春が逆も
どりして行くやうな氣がする。

周圍

東京を去つて三時間餘、かうして水上驛みなかみに着いた時は、周圍はすべて山ばかりであつた。此の驛で、電氣機關車に取りかへられる。いよいよ日本一の長い清水トンネルにさしかかるのである。汽車は動き出した。山を分け、川を傳ひながら上ると、残雪がだんく深くなる。



交路

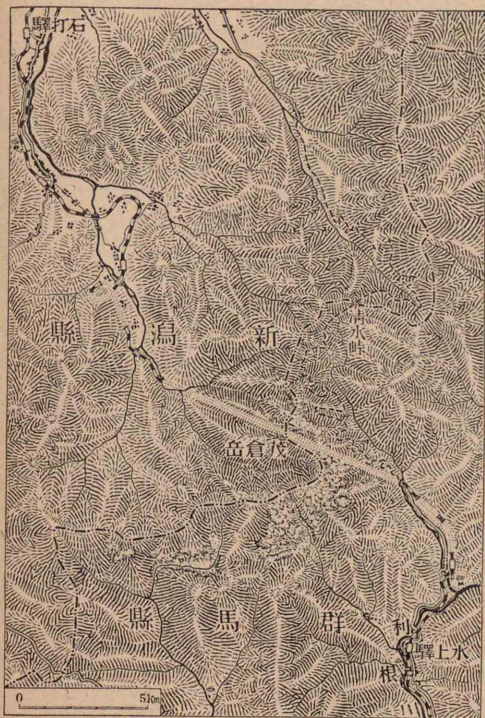


トンネルにはいつた。此のトンネルを過ぎ、第二のトンネルを過ぎた所で、真下を見た。すると、さつき上つて来た線路がずつと下の方に見えて、今通る線路と十文字に交つて居る。いはゆるループ線である。汽車は一驛を過ぎて、間もなく第三、第四のト

過

ンネルを通過した。第五のトンネルこそ、長さ九千七百二米の清水トンネルである。

中にはいれば、何の不思議もない。たゞ暗やみの中をごうくと走るばかりだ。しかし



今刻々と群馬縣が
がつき、新潟縣が
近寄りつゝある。
頭上には、高さ二
千米の茂倉岳が

頭

加

天にそびえて居るはずだ。汽車はやゝ速度
が加つた。下りになつたのである。もう新
潟縣にはいつたのであらう。

なほ、やみのトンネルは續いて居る。時計を
見つめて居ると、八分、九分、十分、いたづらに時
間が長いやうな氣がする。やつと前方から、
かすかな光がさし込むと見る間に、トンネル
はつきた。約十二分である。

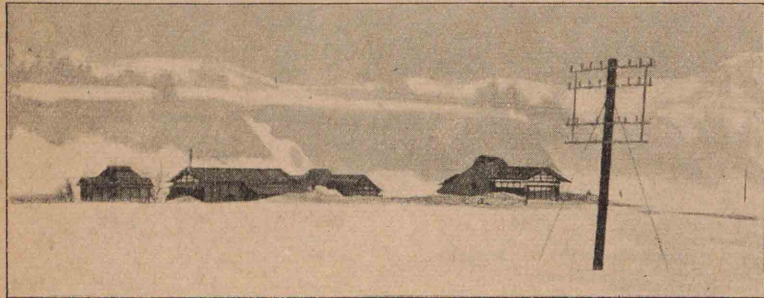
急に世界が明かるくなつた。外には、白雪に

景色

うづもれた景色が開けた。川一筋、北へ流れる外は、山も野も真白である。

汽車は又勢よくトンネルにかけ込んだ。これも大きな圓をゑがくループ線である。

汽車はひた下りに下る。後に、左に、右に、山は恐しく高いが、平野は一刻々々廣くなつて行く。たゞすべての物は雪にう



づもれて居る。雪は深さが二米もあらうか。

村の家々は、わづかに屋根だけを見せて居る。電柱の背の低いことよ。

石打いしうちの驛で、再び蒸氣機關車にかはる。

山を越すまで、あれ程うらゝかに晴れて居た空が、何時の間にか曇つて來た。雪の積つた山々の頂

窓 墨

から上の空は、ちやうど墨でくまどつたやうに見える。と見る間に、行手の山がぼつと白くかすんで来た。忽ち窓外に雪の降りしきるのが見られる。北の國はまだ真冬であつた。

吹雪ふぶきを突いて、汽車はたゞ越後平野えちごを北へ北へと進んで行つた。

瀨	壯	愛	確	敬	穀	靴	說	竿	佐	愉	縣	應	熱	快	轉	情	試
貫	固	改	扱	況	快	炭	疑	速	塔	害	製	優	沉	陽	灰	果	他
般	恥	研	彈	乾	陽	騎	交	昭	般	恥	究	彈	糖	梢	失	要	和
結	億	成	遂	糖	菜	舞	味	約	農	億	功	報	菊	演	殊	技	候
漁	寶	比	告	源	湯	望	師	順	映	澤	貧	占	源	臺	變	湖	疲
路	粒	埋	領	怠	婦	祈	笛	容	路	粒	邊	織	院	團	孝	箇	易
傾	得	滑	館	倒	觸	脫	登	法	普	因	滑	調	院	銃	帥	勤	法
質	即		調	性	性				質	即		調	性	帥			

航諸磯影岬網築威減徑沿眼點
似巧妙洞具關境泉頂逆周墨

終

尋國八

昭和十二年六月五日
昭和十二年六月八日
昭和十二年六月廿一日
修正發行
翻刻發行
翻刻發行

著作權所有

著作兼
發行者

文
部
省

小學國語讀本卷八尋常科用

定價金拾四錢

と

昭和二十二年六月九日
文部省檢査濟

發行所

翻刻發行
兼印刷者

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社
代表者 石川正作

印刷所

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社工場

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地

東京書籍株式會社

大
下
並

広島大学図書

2000019072



7
72